

第百五十六話 帝国陸軍は適応障害だったのか？

個人が、新たな環境に適応できないというケースがままあるが、個人だけではなく組織にも適応障害があるように思う。ある条件の下では精強無比な活躍をした帝国陸軍が、環境条件が異なった作戦では何ら為す術なかったと云われても仕方がない。盧溝橋事件に端を発する支那事変では、帝国陸軍は戦闘では少なくとも最強の軍隊であったが、日米（英蘭）戦となると一矢を報いたこともあったかも知れぬが、殆どの場合、連敗続きであった。

1 大陸作戦適応の陸軍が太平洋島嶼部における作戦遂行の悲劇

支那事変では、国民党軍と八路軍という相手ではあったが、何れも日本陸軍の敵ではなかった。相手は、いうならば、二流或いは三流の軍隊であり、日本軍にとっては正に鎧袖一触に近い状況の連続であった。敵軍が周到に準備した陣地に拠る場合に於いても、伝統の白兵突撃で目標を奪取占領することができた。

ソ連を仮想敵とはしつつも、ノモンハン事件には学ばず、弱敵相手に連戦連勝して、日本陸軍は戦いとはこのようなものであると思い込んでしまったのである。

然るにこのような日本陸軍は、日米開戦に伴い、戦場も気象条件も更には圧倒的な戦力差のある米軍と向き合わざるを得なかった。

日本軍は開戦初頭大小25の島を無血占領できたけれども、これらの占領島嶼群は陸軍兵力による相互支援は困難であり、謂わば大洋に浮かぶ点に過ぎなかった。不沈空母化を期したにも拘らずに、島嶼守備隊を支援すべき航空兵力は劣勢であり、殆どの場合、期待し得なかった。これらの占領島嶼25島の内、米軍が上陸したのは8島に過ぎず残りの17島は見向きもされなかった。米軍の飛び石作戦である。

然も、米軍は上陸に当たり、艦砲射撃や航空攻撃を集中し、島を耕すが如き状況であった。不十分な防御陣地、限られた守備兵力に対し、“鶏頭を裂くに牛刀をもってす”ともいうべき大部隊で上陸、殆どの場合守備日本軍は玉砕に追い込まれたのである。

2 何故、精強無比を謳われた日本陸軍が無残な作戦をせねばならなかったのか？

ノモンハン事件等で近代戦における火力の重要性は理解していたのではなかったのか？第一次世界大戦には本格的に参加しなかったけれども、近代戦の様相は解っていた筈ではなかったのか？

大陸での戦いのイメージで島嶼作戦を敢行しようとしたのではなかったのか？南太平洋を進攻する米軍の戦術戦法や戦術思想を考慮することなかったのだろうか？米軍相手の作戦に対応すべく教育も訓練も装備も編成も変換されなかったのである。

次元の違う戦いには新たな戦いの方策を案出して、それに応ずる編成・装備・教育訓練を行うべきであったが、帝国陸軍は新たなドメインに対応できなかった。

戦いの最中に気付いても時既に遅しなのだろう。こんな筈ではなかったとの思いを抱いた第一線部隊指揮官も多かったのだろうが、・・・残念だ。

マンモスが滅亡したのは環境に適応できなかったからだと言われるが、帝国陸軍もマンモスと同じ適応障害・不全だったと云わねばならない。

陸士・陸大の俊秀を集めた大本営は戦場の実相を掴んでいなかったのか？一部の者は解っていたとしてもそれが大勢とはならなかった。対上陸戦闘の要領については戦法の変更を指示したが、大勢を変えるには至らなかった。

- * 戦いの実相を予測して、それに応ずる編成・装備・教育訓練を施さなければ、必敗は必定である。異次元の戦いを強いられるのは悲劇である。将来戦を予測することは困難ではあるが、的確に予測し準備し得た者の上に勝利の女神は微笑む。大胆な変革無くして勝利無しと知るべきだろう。